
目 次

はじめに	1
本報告書の要約	2
第I章 高校生にとっての異性	
1. 発達の課題としての異性	3
2. 異性とどのくらい接触しているか	4
第II章 家庭の中の高校生	
1. 高校生たちの家庭	18
2. 高校生たちの暮らし方	24
3. 相手のできた生徒たち	30
4. 両親の家庭はモデルになっているか	32
第III章 高校生の抱く家庭観	
1. 結婚生活のスタート	36
2. 結婚後の暮らし方	40
3. 家事の分担をめぐって	44
4. 性に対応した役割分化をめぐって	57
5. 高校生の結婚生活像	61
まとめにかえて	64
●調査票見本	68

はじめに

肉体的には十分成熟しているのに、社会的には一人前扱いをされない青年期は、元来、「境界人」(Marginal Man) であることに特徴づけられるのだが、高校生にとっての恋愛や結婚は、そうした状況をもっともあらわにするものであろう。

異性についての強いあこがれと一人前でないことから生じる自制。そうした不安定さの上に恋愛や結婚が位置している。特に、現在は、マス・メディアを通して、性についての情報が氾濫しているだけに、高校生たちの心のゆれは大きいのではないか。そして、時には、自制力を失い、直接行動に出ることもありえよう。事実、マスコミなどでは、高校生の逸脱行動が報じられる機会も多い。

そうした揺れ動く高校生たちの心の内を知りたいと、今回の調査を実施することにした。恋愛や結婚というデリケートな質問なので、調査校の協力を得られるかどうか不安であったが、さいわい、福武書店・高校通信教育部の協力を得て、順調に調査を完了することができた。いつものことながら、調査に協力してくれた生徒諸君と学校関係者にお礼を述べたいと思う。こうした報告書が、高校教育の明日の実践にすこしでも役立つことができるなら、こんなしあわせなことはない。最後になったが、今回も福武書店各位の御協力を得たことを付記しておきたい。

なお、調査票作成にあたり、われわれの研究会のもうひとつのワーキング・グループである武内清、耳塚寛明、苅谷剛彦、樋田大二郎氏に有益な助言をいただいた。あらためてお礼を申し上げたい。

昭和56年7月

奈良教育大学教授	深谷 昌志
東京学芸大学助教授	深谷 和子
千葉大学助教授	明石 要一
神奈川県立港南台高校教諭	穂坂 明德
千葉県教育センター所員	高橋 美恵
東京学芸大学大学院	横井富美子

執筆分担	第I章	深谷和子	明石要一	横井富美子
	第II章	深谷和子	穂坂明德	
	第III章	深谷昌志	高橋美恵	
	まとめにかえて	深谷昌志		

本報告書の要約

第I章 高校生にとっての異性

- ① 高校生たちは、世間でいわれているほど、異性とのつき合いの経験をもっていない。一例をあげるなら、「手をつないで歩いたりしたことのある者」は23%、「キスしたことがある者」は11%である(表2)。
- ② 両思いの相手のいる生徒は、男子14%、女子18%である(図2)。しかし、両思いの相手のいる者でも、キスの経験者は37%にとどまっている(図3)。
- ③ 多くの高校生は、直接行動にいたらないまでも、せめて、「誕生日のプレゼントをする」(73%)、「喫茶店でおしゃべりする」(71%)相手を欲しいと思っている(表6)。
- ④ 高校生が肉体関係を持つことに、男子の45%、女子の68%が反対している(図5)。
- ⑤ 男子の53%、女子の64%は、自分は異性にもてないと感じている(図8)。
- ⑥ 現実の姿はともあれ、95%を超える生徒が、恋愛結婚をしたいと願っている(図9)。

第II章 家庭の中の高校生

- ① 高校生たちは、自分の家庭を「明るく」「自由で」「まとまった」と評価している(図11)。
- ② 仕事に誇りを持つ父(83%)と料理の腕前はかなりの母(76%)とから家庭が成り立っている(図12)。

- ③ 夫婦仲の悪い家庭は1割前後にすぎず、半数の家庭は、夫婦円満だという(図15)。
- ④ 85%の親たちは、子どもたちを信頼している(図17)。
- ⑤ 個室を持つ生徒は76%に達する(図18)。
- ⑥ 親の家庭は自分たちのモデルになりうるかの問いに対し、「なる」と答えた者は27%、「ならない」が42%であった(表18)。

第III章 高校生の抱く家庭観

- ① お金がなくとも、結婚식을重視したいと考えている生徒が、男子の52%、女子の58%を占める(表20)。
- ② 専業主婦のいる家庭を望む者は、男子の83%、女子の55%である(表23)。
- ③ 夫に弁当を持たせたいと考えている女子は92%、妻の手弁当を持っていきたいと思っている男子は80%に達する(表26)。
- ④ 結婚後、妻は家庭に入った方がよいと考えているのは、男子の85%、女子の63%である(表26)。
- ⑤ 朝食はすべて妻が作ると考えている生徒は、男子の71%、女子の77%に達する(表29)。
- ⑥ 共働きの家庭でも、朝食作りは妻がすると思っている者が77%に達する(表30)。
- ⑦ 家事はすべて妻がすると考えている者は、男子の29%、女子の24%である(図31)。
- ⑧ 女性のしあわせは家庭にあると思っている者は66%、仕事に打ち込むのが男性の生き方と考えている者は53%である(図35)。

第I章 高校生にとっての異性



1. 発達の課題としての異性

社会学や心理学の教科書の中にしばしば登場する言葉に「発達課題」がある。ヒトが成長し発達していくプロセスには、それぞれの発達段階ごとに、それぞれ個人的に達成しなければならない心理身体的・社会的課題があると考えられるのである。もしある課題の達成に失敗すると、それは次の段階の発達課題の達成を阻害することになる。だから、われわれがヒトとして全き発達を遂げようとするなら、乳児期から老年期に至るまで、おのおのの段階の多くの発達課題を、その都度十分に達成していかなければならないことになる。

日本とアメリカ

さて、思春期から青年期にさしかかった若者たちが、やり逃げなければならない「発達課題」の中には、「異性関係における自己の役割を学ぶ」「性の特徴を備えるようになった肉

体を受け入れ、コントロールする」「結婚（可能な）相手との間に、強い相互的な愛情のきずなをつくり上げる」などが含まれている。このような対異性行動のありかたを学ぶ時期は、たとえばアメリカでは思春期を待たずに、子どもがかなり年少の時期から開始されるが、日本ではそれらしい時期が見当たらない。それどころかむしろ思春期に入った子どもたちには、そうした接触を避けるような働きかけがなされる。

したがって高校生という時期をとってみても、日本の高校生とアメリカの高校生では、この点で大きな開きがある。例として日本青少年研究所が、1978年に行った日米高校生比較調査（対象数約3,000名）の結果を見よう。たとえば、2人だけでデートする異性の有無は、図1に掲げたようになる。1人以上の相手のいる者は、アメリカで64%に対し、日本ではわずか27%にすぎない。また表1に掲

図1 2人だけでデートする異性の数



表1 男女交際についての親・教師の考え方

		日本の親	アメリカの親	日本の教師	アメリカの教師
1	交際をすすめ、援助してくれる	2.9%	17.8%	1.8%	6.8%
2	あなたの交際の相手としてふさわしいかどうかについて意見を言う	13.1	23.5	9.8	4.1
3	異性との交際は、まだ早すぎるという	12.3	1.5	19.8	2.4
4	自分にまかせてくれる	50.2	42.2	18.2	26.1
5	無関心である	19.3	5.0	43.6	45.2

げたように、男女交際をすすめてくれる親はアメリカで18%に対して日本ではわずか3%。逆に「早すぎる」とネガティブな態度をもつ親は、アメリカで2%なのに日本では12%となっている。

このようにわが国では、子どもの人格形成に際して、この発達課題そのものが正面からとりあげられることは少なかったように思われる。しかし若者はごく近い将来に配偶者を選択し、結婚し、家庭生活を送ることになる。遅くとも高校生段階ぐらいから、この発達課題を意識した人間形成が企図されないと、生涯にわたって続けられる対異性行動や結婚生活が、健康で望ましい姿を失ったものになる可能性は十分に考えられるのではなかろうか。

このレポートがとり扱おうとしているのはまさに高校生たちのそうした側面での問題状況についてである。彼らはいま、異性とどのように接触し、どんな配偶者選択の構えをもち、どんな結婚をし、どんな結婚生活を将来像として描いているのだろうか。

サンプルの構成

本調査の対象校は、北海道、東北、北陸、東京、中部、中国、九州にある普通科高校17校で、サンプル数は高1と高2の男子2,052名、女子1,751名、計3,803名である。昭和56年2月に、学校経由のアンケート調査が行われた。

2. 異性とどのくらい接触しているか

翔んでいない高校生たち

まず表2は、高校生たちがこれまで親しい異性とどのくらい接触した経験をもつかにつ

いてたずねてみたものである。

「誕生日にプレゼントする」「喫茶店でしゃべる」などの何気ないものから、「ラブホテルへ行く」「キスする」のようにかなり直接的な行為に至るまで、11種類の接触のしかたを挙げ、「今まで(わりと)好意をもっている相手(異性)をさそって、またはさそわれて、(2人だけで)次のようなことをしたことがありますか」とたずねたものである。

一見して気づくのは、生徒たちの異性との接触経験が、みじめなまでに乏しいことであろう。「キスをする」「ラブホテルへ行く」などの行為が、多くの生徒にほとんど一度も経験されていないのは当然かもしれないが、「誕生日のプレゼント」や「喫茶店でおしゃべり」のような、とくにどういうことのない行為まで、5～6割もの生徒が「1度もない」と答えている。戦前戦中の若者たちならいざ知ら

ず、現代の高校生たちがどうしてこんなにも、異性との自然で日常的なつきあいを欠いているのだろうか。

またこうした接触の経験は、性別によってどう違うか。表の上部、いわばプラトニックな接触と、下部のより直接的な接触の数字を、男女で比較してみると、わずかだが面白い差が見い出される。「誕生日にプレゼント」を1度もしたことのない男子は62%、これに対して女子は49%、の数字の開きが示すように、プラトニックな接触の経験は、わずかながらどの項目も女子が男子より多い。これに対して直接的経験は、「ラブホテルへ行ったことのある者」男子2.3%女子1.4%が示すように、わずかだが男子に多い傾向が見られる。

またこれを学年別に見たのが表3である。当然のことだが、1度も経験のない者の割合は、1年生の時より2年になって減っている。

表2 異性とのつきあい (%)

		何度もある	4～5回ある	1～2回ある	1度もない
誕生日にプレゼント	♂	4.4	5.5	28.4	61.7
	♀	4.8	6.3	40.2	48.7
喫茶店でおしゃべり	♂	11.8	6.0	15.7	66.5
	♀	12.5	7.5	19.5	60.5
持ち物を交換する	♂	4.1	3.1	15.6	77.2
	♀	3.7	3.4	18.8	74.1
夜中に長電話をする	♂	8.4	4.5	9.2	77.9
	♀	9.4	5.2	9.5	75.9
将来の生活設計を話し合う	♂	1.8	0.9	4.5	92.8
	♀	1.7	1.2	7.5	89.6
一緒に勉強する	♂	1.5	1.0	3.5	94.0
	♀	1.3	0.9	3.9	93.9
手をつないだり腕をくんだりして歩く	♂	7.3	4.1	12.9	75.7
	♀	6.4	3.7	12.5	77.4
キスをする	♂	5.5	1.3	4.6	88.6
	♀	4.4	1.7	4.1	89.8
泊まりがけで旅行	♂	1.3	0.2	0.9	97.6
	♀	0.6	0.1	0.9	98.4
同伴喫茶へ行く	♂	1.5	0.4	1.3	96.8
	♀	0.5	0.3	1.5	97.7
ラブホテルへ行く	♂	1.0	0.5	0.8	97.7
	♀	0.5	0.4	0.5	98.6

ただし、その減り方は、「喫茶店で話す」を除いては、あまり顕著なものではない。残念にも調査対象からはずしたが、この分では高3になったところで、大して経験の増加は期待できないだろう。とすると彼らはこうした、(ある意味で)貧しい青春のまま、実社会に出、または大学へ進学して行くのだろうか。

それにしても、高校生たちの、この翫ばなさはどうしたものだろう。マスコミを通しての報道や、われわれが道路や車中や公園など

で見聞するヤングの印象とは、あまりにもへだたりがある。人目につくのは一部の高校生で、大部分の高校生は、同じクラスで学び、一つ屋根の下で、1日の多くの時間を過ごしながら、不自然なまでに、異性との接触を回避しているようにも見えてくる。いったいこれは若者としての高校生のあるべき姿として、果たして「健康な」姿とっていいのだろうか。

表3 学年×現在の異性とのつきあい

1度もないと答えた%

	男 子		女 子	
	1 年	2 年	1 年	2 年
誕生日にプレゼント	64.5	58.6	53.3	44.1
喫茶店でおしゃべり	75.8	56.2	69.8	51.0
持ち物を交換する	79.7	74.4	75.0	73.2
夜中に長電話をする	83.2	72.3	80.1	71.6
将来の生活設計を話し合う	94.9	90.8	92.0	87.1
一緒に勉強する	96.3	91.3	95.4	92.2
手をつないだり腕をくんだりして歩く	81.0	69.9	82.0	72.7
キスをする	91.3	85.6	92.2	87.3
泊りがけで旅行	98.4	97.0	99.1	97.8
同伴喫茶へ行く	98.4	95.2	98.4	97.2
ラブホテルへ行く	98.0	95.8	98.8	98.5

両思いの相手16%

この点を考えていくために、高校生たちが現在好ましい相手や特定の相手をもっているかどうか見てみよう。図2には、①両思いの相手がいればつきあっている、②片思いの相手がある、③関心のある相手はいるが、とくにつきあいたいほどではない、④そうしたことに無関心、の4つの場合の割合を示してある。まず、現在つきあっている相手がいるのは男子14%、女子18%と予想外の少なさである。といって「関心のある相手がいらない」と答えた生徒もそれほど多くはない。男子32%女子

25%という数字は、逆に残りを数えてみると、男子68%女子75%は特定の異性に大なり小なり関心はもっているということになる。しかし種々の理由から、いまひとつ、直接つきあうほどの仲には発展させていない者が多いというのが、現状のようである。こうした状況では、表2で見たように、対異性行動の経験が極端に乏しくなるのも当然であろう。

この点をもうすこし、数字で追ってみよう。図3・図4は、現在「両思い」の状態にある生徒と、それ以外(つきあっている相手のない生徒)とにわけて、異性との接触経験を図示したものである。男子に例をとるなら、

図2 好きな異性がいるか



「誕生日にプレゼント」した経験のある者は、両思い群で78%にも達するのにも、その他ではわずか32%。「夜中の長電話」の経験は、両思い群55%、その他で17%。また「キス」の経験者は同じく37%と7%。どの項目でも、現在相手がいるかいないかで、その経験の開きは大きな差である。

考えてみると戦後男女共学が開始されて、すでに30年を経過した。本サンプルの88%は共学校でもある。しかし高校生たちは、一つ屋根の下で学びながら、なぜこんなにも、異性との自然な関係（ただし直接的な行動は、とりあえず除いて考える）を成立させられず、異性間の友人関係のないままに生活しているのだろうか。むろん本調査の対象がほぼ進学校であることを考えてみなければならないだろうが、それにしても現在の日本の高校生たちの6割は卒業後そのまま実社会へ出る計算になる。いわばいちばん安全にいちばん純粋に異性との友情や交際が成立させられる高校生時代を、もう少しなんとか人間味のある、豊かで楽しい時代として過ごすことができないうものだろうか。それはまた、とりもなおさず、この時期の発達課題を十分に達成することになるのではないだろうか。

両思いの成立する

学校風土

しかしこれら「両思い」のカップルの出現率は、学年や学校によって、かなりの違いが見られるようだ。まず、学年との関連では、表4に示したように、1年生より2年生の方に、割合がふえている。男子の場合1年生の10%が2年生で17%へ、女子は15%から21%

へと増加している。また面白いのは学校差で、表5に掲げたように、両思いの出現率の高い学校とそうでない学校がある。この中でE、I、K、N、Q、の5校はサンプルに学年や性別の偏りがあるので、残りの12校を比べてみると、宮城D校の男子22%女子35%を筆頭にして、宮城C校20%と26%、北海道B校19%と26%などが高い方であり、逆に両思い率の低いのは、東京F校7%と9%、岡山O校9%と7%などがある。これは、ある種の学校風土（スクール・クライメイト）のようなものの違いであろう。

異性と接触したい

気持ちはある

見まわすとどこにも楽し気なカップルがいて、テレビのスイッチをひねっても、新聞や雑誌にもタレントたちの華やかな話題。こうした雰囲気の中で、わが高校生たちだけが、ストイックに、グレーカラーで暮らしている気配は、どうしてなのだろう。

彼らは、異性との接触を望んでいないのだろうか。表6、表7は、「もし今、好きな人ができたら」という仮定の下で、そうした接触をしたいと思っているかどうか、たずねた結果である。

表6（男子）を例にとるなら、「誕生日にプレゼントする」の73%から少々危険な行為でもある「ラブホテルへ行く」の29%まで、とにかくかなりの割合で、それらを望んでいる者がいるのがわかる。

それなのに現実はどうだろう。さきに掲げた図から、「1度でも経験したことのある者」の割合を右端に再掲しておいた。

図3 両思いか×現在の異性との付き合い (男子)

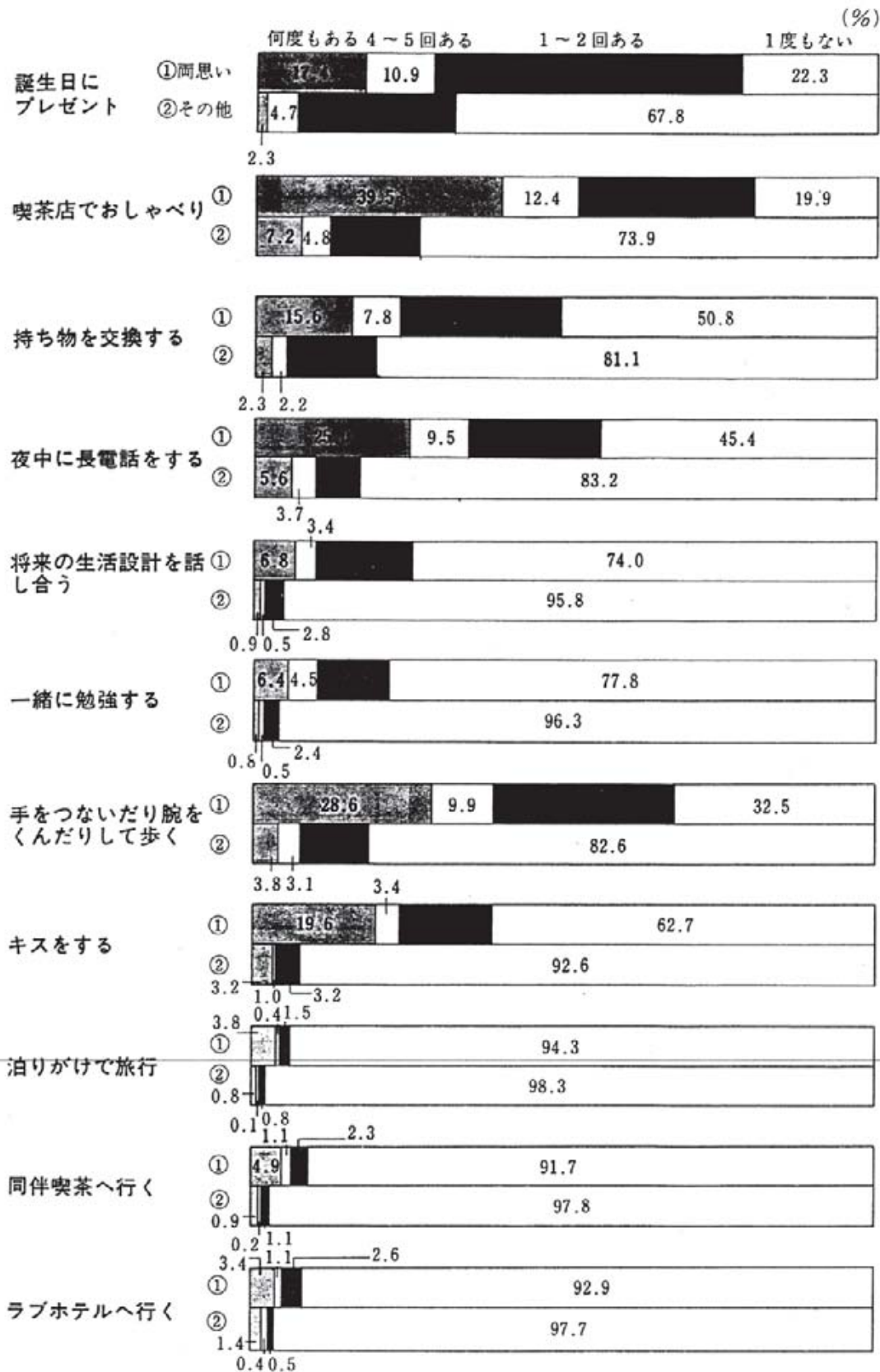


図4 両思いか×現在の異性との付き合い(女子)

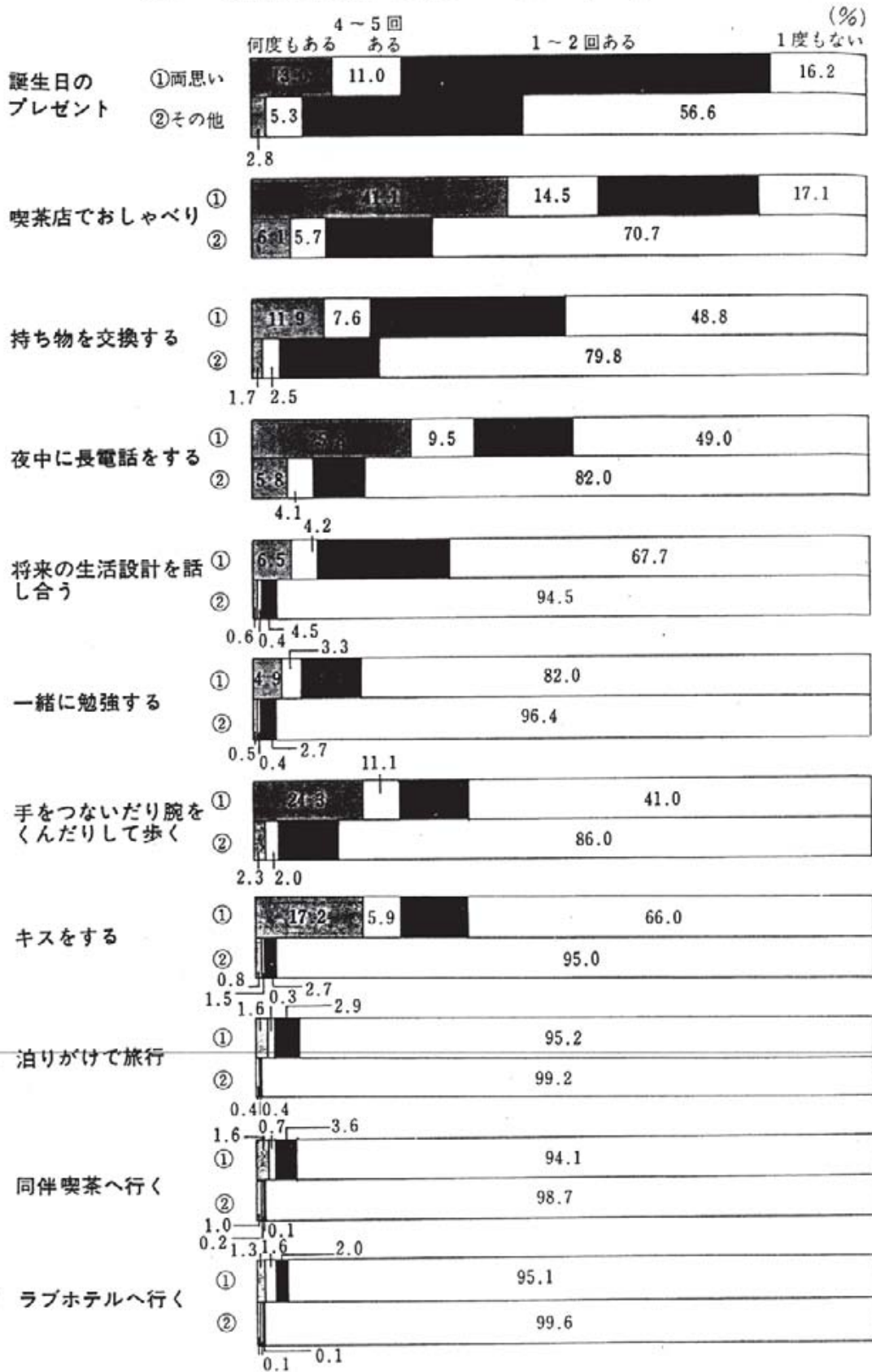


表4 学年×好きな異性がいるか (%)

		両思い	片思い	関心のある相手はいる	関心ない
男子	1年	10.4	25.6	29.5	34.5
	2年	16.8	24.5	28.8	29.9
女子	1年	14.8	29.2	31.6	24.4
	2年	21.3	24.3	28.5	25.9

表5 学校×好きな異性がいるか (%)

		両思い	片思い	関心のある相手はいる	関心ない	
北海道	A	♂	18.3	29.5	26.1	26.1
		♀	19.6	25.2	21.5	33.7
	B	♂	18.6	18.6	28.0	34.8
		♀	25.5	21.9	26.3	26.3
宮城	C	♂	20.1	25.4	19.4	35.1
		♀	25.6	33.0	24.4	17.0
	D	♂	22.0	28.8	18.6	30.6
		♀	35.0	20.0	27.5	17.5
	E	♂				
		♀	20.8	20.1	20.8	38.3
東京	F	♂	6.7	32.4	21.0	39.9
		♀	9.2	26.4	28.7	35.7
	G	♂	17.3	22.0	32.4	28.3
		♀	19.2	30.4	31.2	19.2
	H	♂	12.1	20.1	31.6	36.2
		♀	16.7	29.5	35.9	17.9
愛知	I	♂	12.0	14.3	26.9	46.8
		♀				
	J	♂	10.7	29.3	39.3	20.7
		♀	9.0	32.4	34.3	24.3
	K	♂	9.8	25.1	28.4	36.7
		♀	13.9	25.0	36.1	25.0
石川	L	♂	10.3	28.7	29.4	31.6
		♀	20.0	18.9	39.0	22.1
	M	♂	15.9	23.4	25.2	35.5
		♀	13.7	23.7	35.9	26.7
岡山	N	♂	12.5	26.4	36.1	25.0
		♀	16.9	36.3	27.3	19.5
	O	♂	8.7	30.4	41.3	19.6
		♀	7.0	33.0	32.0	28.0
福岡	P	♂	9.4	30.2	30.9	29.5
		♀	10.8	31.1	33.8	24.3
	Q	♂	19.3	22.8	31.6	26.3
		♀	23.4	25.0	34.4	17.2

※女子校
○2年生のみ

※男子校
○2年生のみ

○1年生のみ

○1年生のみ

○2年生のみ

表6 好きな人ができたら次のようなことをしたいか (男子) (%)

	ぜひしたい	できればしたい	あまりしたくない	ぜったいしたくない	やったことがある
誕生日にプレゼント	28.9	44.4	20.1	6.6	38.3
	73.3		26.7		
喫茶店でおしゃべり	31.6	39.6	22.6	6.2	33.6
	71.2		28.8		
持ち物を交換する	15.2	24.7	46.9	13.2	22.8
	39.9		60.1		
夜中に長電話をする	11.5	14.7	46.2	27.6	22.0
	26.2		73.8		
将来の生活設計を話し合う	11.3	20.8	44.9	23.0	7.1
	32.1		67.9		
一緒に勉強する	15.7	32.7	32.3	19.3	6.1
	48.4		51.6		
手をつないだり腕をくんだりして歩く	24.7	33.5	32.7	9.1	24.3
	58.2		41.8		
キスをする	22.7	35.0	26.3	16.0	11.4
	57.7		42.3		
泊まりかけて旅行	18.4	28.8	29.8	23.0	2.3
	47.2		52.8		
同伴喫茶へ行く	12.2	17.3	42.9	27.6	3.2
	29.5		70.5		
ラブホテルへ行く	14.6	14.6	34.4	36.4	3.1
	29.2		70.8		

表7 好きな人ができたら次のようなことをしたいか (女子) (%)

	ぜひしたい	できればしたい	あまりしたくない	ぜったいしたくない	やったことがある
誕生日にプレゼント	45.6	45.0	7.2	2.2	51.2
	90.6		9.4		
喫茶店でおしゃべり	28.7	48.0	20.3	3.0	39.5
	76.7		23.3		
持ち物を交換する	11.0	34.0	45.2	9.8	25.9
	45.0		55.0		
夜中に長電話をする	7.9	18.4	45.3	28.3	24.1
	26.4		73.6		
将来の生活設計を話し合う	9.1	25.3	44.2	21.4	10.4
	34.4		65.6		
一緒に勉強する	19.5	42.9	25.2	12.4	6.2
	62.4		37.6		
手をつないだり腕をくんだりして歩く	15.2	33.4	32.7	9.1	22.6
	48.6		51.4		
キスをする	7.6	23.6	35.5	33.3	10.2
	31.2		68.8		
泊りがけて旅行	5.9	16.1	31.0	47.0	1.6
	22.0		78.0		
同伴喫茶へ行く	3.0	7.1	36.1	53.8	2.2
	10.1		89.9		
ラブホテルへ行く	2.1	2.6	16.2	79.1	1.3
	4.7		95.3		

希望と実際の経験のあまりに大きな差を見ていると、胸の痛むおもいがしてくるのは、筆者だけであろうか。

さて、こうした接触への希望は、男子生徒と女子生徒とで、どう違うだろうか。表6と表7とを見比べてみると、面白い傾向が見いだされる。すなわち男子は、「ラブホテル」などの直接的行為をより望み、女子は逆に「プレゼント」のようなロマンチックな行為を望んでいることがわかる。すなわち女子の「ぜひ・できれば」したい割合を、カッコ内を男子にして示せば、次のようになる。

A	プレゼントする	90.6%	(73.3%)
	喫茶店で話す	76.7	(71.2)
	一緒に勉強	62.4	(48.4)
	持ち物の交換	45.0	(39.9)
	将来を話し合う	34.4	(32.1)
	夜中の長電話	26.4	(26.2)
B	腕を組んで歩く	48.6	(58.2)
	キスをする	31.2	(57.7)
	泊りがけで旅行	22.0	(47.2)
	同伴喫茶へ行く	10.1	(29.5)
	ラブホテルへ行く	4.7	(29.2)

ロマンの衣で つつんでほしい？

さて、相手ができただけの場合のこうした直接的な行為はどの程度を限度として、望まれているのだろうか。表8は相手の有無との関連で集計してみた結果である。

まず言えるのは①両思い②片思い③関心はある④無関心の順に、「直接的行為」への欲求が高まっていることである。しかし男子を例にとると、たとえ両思いや片思いの相手がいかにせよ半数以上が望んでいる行為は、「キス」と「泊りがけの旅行」までで、同伴喫茶やラブホテルへ行くのとは、一線が画されている感じである。泊りがけの旅行とラブホテルや同伴喫茶は、意味の上では同じはずなのだが、彼らには違った意味をもつ行為のようである。後者は行為そのものが目的であり、またその語感にもどこか汚れた感じがある。それに泊

りがけの旅行は、宿につくまでの長い時間を2人で愛を語って過ごし、その後も長い夜を共に星を見つめ愛を確かめ合って過ごす、というロマンの衣を着ている。自分の中にある衝動を正面にひき出すには、彼らはまだ幼くて勇気と経験に欠けているのかもしれない。

肉体関係をどう思うか

さてここで、そうした直接的な行為について、彼らがどんな意見を持っているかを見てみよう。

図5は、「高校生としては、どんなに相手が好きになっても、肉体関係にまでは進まない方が望ましい」に対する賛否を、わかりやすくするため賛否の数字を逆にして表したものである。

図が示すように「やや」も含めて好きになった相手との深い関係を肯定する者は、男子26%女子12%と、思ったより低く、否定する者は男子45%女子68%で、肯定者を大きく上まわっている。しかも女子の方が男子よりそうした関係に否定的であることが見られる。こうした肯定率の差が、前に引用したデータの接触率の性差に反映しているのであろう。

しかしこうした「意見」は、実際に相手が得られた段階ではどう変わってくるのだろうか。それを見たのが図6である。現在両思いの相手がいってつきあっている生徒と、そうでない生徒をわけて集計してみると、図のように男子も女子も、深い関係の肯定者がふえている。また参考までに図の右端に、ラブ・ホテルの経験者の割合をカッコに入れて示した。実際にこうした関係の経験者は、この数字を上まわるであろうが、これ以上の直接的質問はできなかったので、この数字を使うならば、意見としては賛成の者でも、実際の行為はこれを大きく下まわっている様子が見られる。

しかしこのような肉体関係についての、ある意味ではストイックすぎる考え方を、そのままわれわれは手放して喜んでいいのかどうか、簡単には判断できないような気もする。

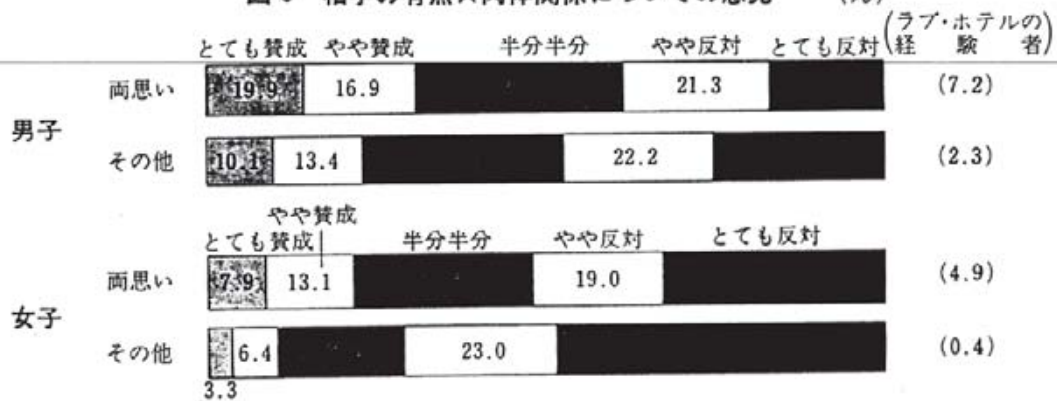
表8 好きな異性がいるか×好きな人ができたら次のようなことをしたいか (%)

		男 子		女 子	
		ぜひ・でき ればしたい	あまり・ぜった いしたくない	ぜひ・でき ればしたい	あまり・ぜった いしたくない
キスをする	両 思 い	75.2	24.8	46.3	53.7
	片 思 い	70.3	29.7	38.8	61.2
	関心のある相手いる	58.8	41.2	25.4	74.6
	関 心 な い	39.6	60.4	19.7	80.3
泊まりがけて旅行	両 思 い	61.5	38.5	40.7	59.3
	片 思 い	53.8	46.2	24.5	75.5
	関心のある相手いる	46.3	53.7	15.0	85.0
	関 心 な い	37.1	62.9	13.9	86.1
同伴喫茶へ行く	両 思 い	35.4	64.6	17.3	82.7
	片 思 い	33.2	66.8	11.1	88.9
	関心のある相手いる	29.6	70.4	7.3	92.7
	関 心 な い	23.8	76.2	7.6	92.4
ラブホテルへ行く	両 思 い	37.4	62.6	11.0	89.0
	片 思 い	31.8	68.2	3.8	96.2
	関心のある相手いる	28.8	71.2	2.4	97.6
	関 心 な い	24.3	75.7	3.8	96.2

図5 高校生の肉体関係について



図6 相手の有無×肉体関係についての意見 (%)



なぜならば、肉体関係の否定は、ただ単に相手がないために、伝統的な価値観をそのままのみにしていることの表れのような気がするからだ。異性との（直接的行動に至る前の）十分な接触を経験し、異性間で友情も愛情も十二分に体験した後で、こうした意見が生まれてきてこそ、それは借り物でない自分の意見、自分の主張ということになるのではなかろうか。

相手のいるのはどんな生徒か

このように見てくると、高校生の場合、両思いの相手ができるかどうかによって、その意識や行動は大きく変化するかのようなのである。

では一体、そうした相手をもっているのは、どんなタイプの生徒たちなのか。いくつかの側面をひろってみよう。

まずはじめは、成績との関連を考えよう。われわれにはなんとなく成績のよくない生徒が相手を持っているようなイメージもあるし、逆に、それは旧世代の人間のもつ印象で、成績のよい子が両手に花の状態にあるというイメージもないではない。

その点を見たのが図7で、数学の成績を、キーにして、クロス集計をしてみた。図が示すように、とくに成績のよし悪しとの関連は見出されていない。どの層にもある割合で同じように両思いも、片思いも、無関心派もいることがわかる。

図7 数学の成績×好きな異性がいるか (%)

		両思い	片思い	関心のある 相手はいる	関心なし
男子	とても かなり やや } 得意	15.6	23.9		29.3
	ふつう	22.7	20.5		33.8
	やや苦手	13.1	29.3		29.0
	とても かなり } 苦手	12.1	27.6		37.3
女子	とても かなり やや } 得意	16.9	33.3		21.3
	ふつう	18.8	23.7		26.6
	やや苦手	17.8	27.1		24.0
	とても かなり } 苦手	18.0	25.9		26.7

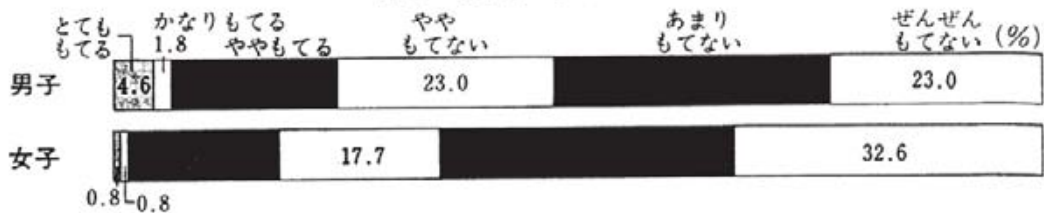
表9 好きな異性がいるか×スポーツの自己評価 (%)

	男 子			女 子		
	とても・かなり・やや得意	ふつう	とても・かなり・やや苦手	とても・かなり・やや得意	ふつう	とても・かなり・やや苦手
両 思 い	66.4	25.9	7.7	40.6	30.6	28.8
片 思 い	43.9	32.0	24.1	32.6	34.1	33.3
関心のある相手いる	46.0	33.9	20.1	28.7	33.7	37.6
関 心 な い	34.2	34.0	31.8	22.2	30.9	46.9

表10 好きな異性がいるか×がんばる力の自己評価 (%)

	男 子			女 子		
	とても・かなり・ややある	ふつう	とても・かなり・やらない	とても・かなり・ややある	ふつう	とても・かなり・やらない
両 思 い	46.2	32.8	21.0	25.3	47.7	27.0
片 思 い	37.8	38.8	23.4	36.4	40.0	23.6
関心のある相手いる	37.0	39.8	23.2	32.7	44.8	22.5
関 心 な い	29.4	42.8	27.8	25.1	47.4	27.5

図8 異性にもてるか



しかし面白いのは、表9「スポーツができるか」の自己評価との関連である。男子を例にとれば、両思い群にはスポーツの得意な生徒が66%もいるのに、片思い群では44%、関心のない群では34%と低くなっている。女子もほぼ同様の傾向である。これから見ると、いわゆるスポーツマンやスポーツの花形選手には、生徒の熱いまなざしが注がれるということかもしれない。

また表10は、「物事をがんばる力がありますか」の項目とのクロスであるが、女子の場合には関係がないが、男子は両思い群に「がんばる」者が46%と多く、無関心群の29%を大きくしのいでいる。がんばる力は、ある種の男性的魅力として女子生徒の目に映るのかもし

れない。

両思い群の特性については、他にも多くの条件を持ってみたが、とくに顕著な傾向は見いだせなかった。

異性の友人との親しいつきあいに恵まれず、いわば貧しい青春、かたよりのある青春、といったイメージのデータを見てきたわけだが、ここで彼らが、そうした自分たちをどうとらえているか、「あなたは自分を異性にモテるほうだと思っていますか」の設問で、明らかにしてみよう。

図8にその結果を示した。男子と女子では男子の方が多少自信をもっているものの、それでも「とても・かなり」もてると思っている者はわずか6%。女子は2%という少な

図9 どのような結婚がしたいか (%)

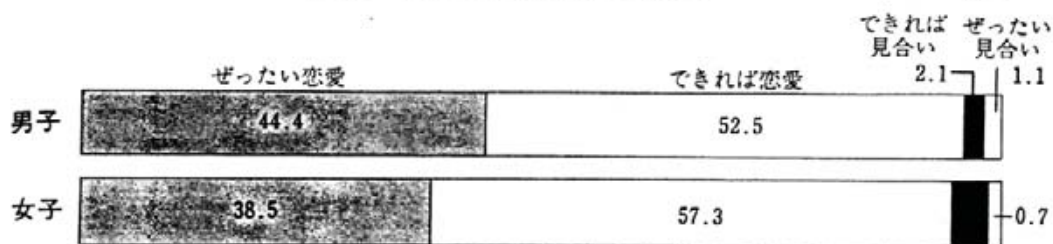
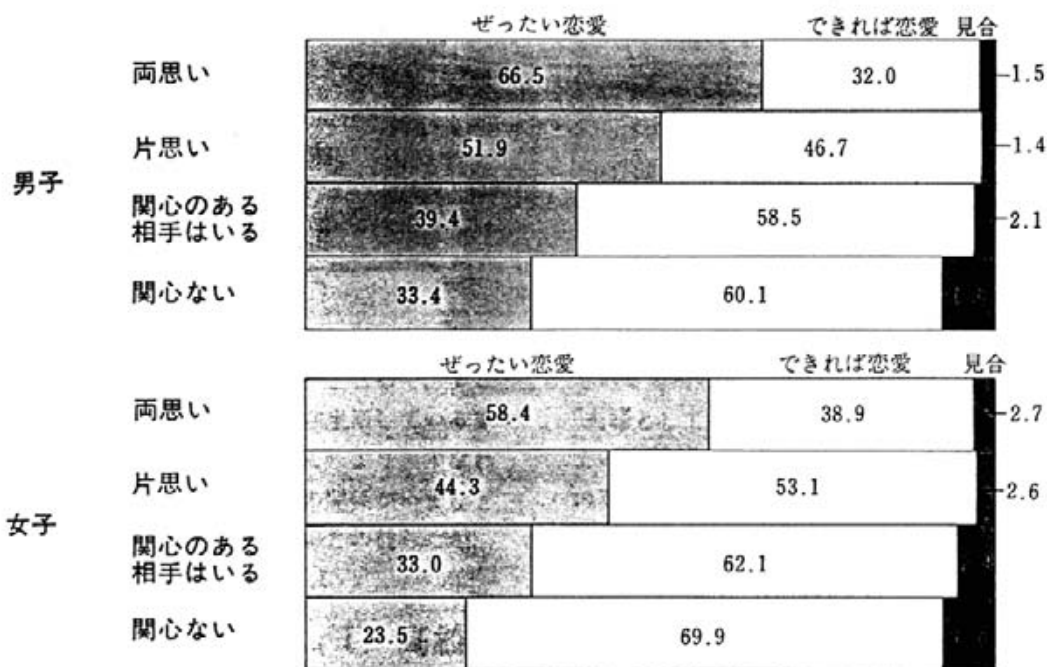


図10 好きな異性がいるか×どのような結婚がしたいか (%)



である。「やや」を入れても、もてると思っている者は男子24%、女子19%でしかないのは、どうしたわけであろう。人類の半分は異性であり、クラスの半分は異性の友人が占めている。それなのに、もてないと思ってイジケて暮らしている高校生たちの現状には、何とも胸の痛むおもいがする。

何が何でも恋愛結婚

さてこのように、現在両思いの相手に恵まれず、異性との接触の経験も少なく、自分をも

てないと思っている生徒たち。その彼らは、将来にどんな希望を託しているのかに接近したくなる。その手はじめとして、まず、「将来どんな結婚をするつもりですか」とたずねた結果を図9に示した。「見合いで」と答えているのは男子3%女子4%に過ぎず、恋愛結婚と答える者の割合が男子97%女子96%にも達している。

そのうち「絶対恋愛で」と答える者は男子44%女子39%で、割合としては「できれば恋愛」というややひかえめな生徒たちが多くなっている。しかしこれは恋愛で結婚する希望

の強さからのものではなく、「もし相手が現われれば、絶対恋愛で」という心情からのものであろう。その証拠には、図10に示したように、いま相手がいるかどうかと、恋愛で結婚したい者の割合は、大きな関連がある。現在相手がいる者は自信をもって恋愛でと答え、片思いの相手のいる者は、それよりやや低めのトーンで、恋愛と答え……という情景が見出される。

とにかくひかえめな反応の下から、「今はバツとしないが、できれば将来はいい相手にめぐりあいたい」という生徒たちの声が聞こえてくるような気がする。

第II章 家庭の中の高校生



未来の異性関係、すなわち結婚に夢を抱く高校生たちの姿が現れてきたところで、すこし視点を変えて、彼らが現在生活している家庭の姿に接近してみることにしよう。すなわち学校では、異性の友人との関係がいまひとつバツとせず花の咲かない感じの彼らだが、

一人ひとりの家庭の中ではどのように暮らしているのだろうか。親子の関係はむろん、両親の「夫婦としての」あり方を彼らはどう受けとめているのだろうか。ある意味ではこれが彼らの異性観を作り、将来の家庭生活像へ大きな影響を及ぼすものかもしれないのである。

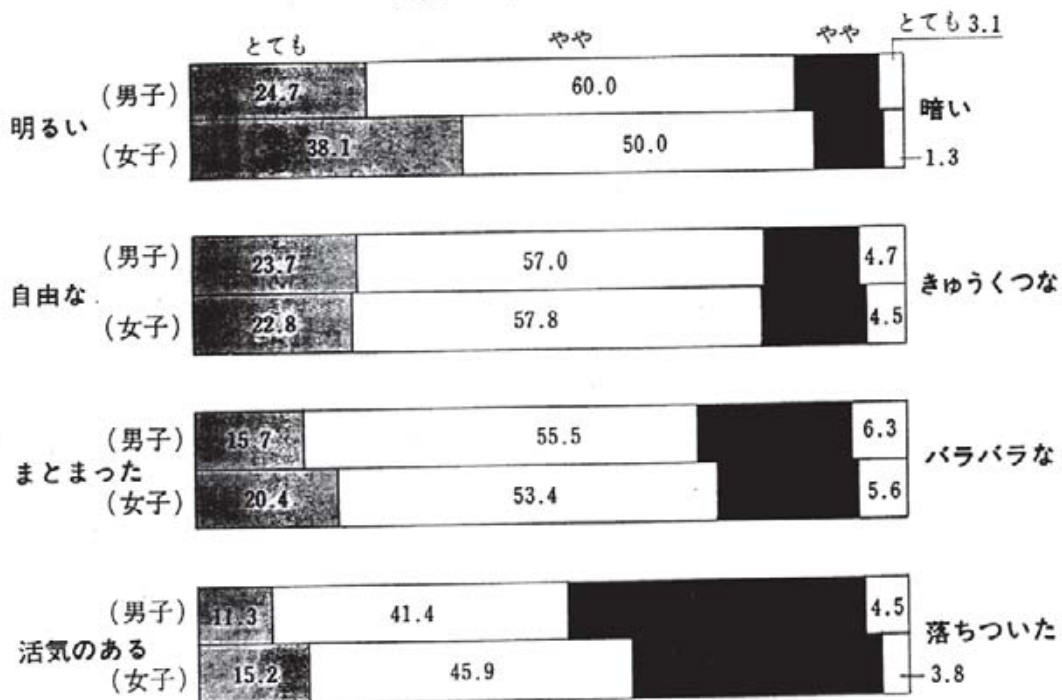
1. 高校生たちの家庭

家庭のプロフィール

彼らの家庭のプロフィールを示すデータは、巻末に掲げたので、それを参照してほしい。家族のサイズは5人家族28%、6人以上の家族24%と、現代の家族の中ではやや大きめだが、祖父母のいる家族（拡大家族）は34%ではないから、これは子どもの数がやや多いことを示す。父親の職業はサラリーマンが35%。しかし、管理職の割合が、14%と比較的多く、経済的にはふつうよりやや恵まれた層の人びとから成ると考えられる。母親について

も、全くの専業主婦は24%でしかなく、フルタイム勤務者が24%と、子どもが巣立つ時期を迎えて、手の空いた年齢の主婦の姿がある。彼らの両親の結婚のきっかけは、恋愛結婚がわずか27%、見合いは45%と、はるかに多い。もっとも不明が23%もいるので、実際の数字はすこし動くだろうが、それにしても第I章の終わりに見た恋愛結婚の希望者96%という数字とはズレがある。両親の結婚生活に対しては、彼らは、何かとイカさない部分を感じているのかもしれない。

図11 家庭の雰囲気 (%)



明るく、自由で まとまった家庭

こうした家庭の中にあつて、生徒たちは、それぞれ自分の家庭をどう評価しているだろうか。まず全体の印象をSD法で評定させた結果が、図11である。自分の家庭をネガティブに評価する生徒は思ったより少ない。暗い家庭(とても・ややをあわせて)が約15%、きゅうくつな家庭が約20%、バラバラな家庭が約30%となっているだけで、大部分は自分の家庭にかなり十分な評価をしているのが特徴である。そのこと自体はいいことなのかもしれないが、高校生という年齢段階を考えるとこの頃は、親にも家庭にもいちばん批判的になる時期のはずなのに、こんなに手放して自分の家庭を受けとめていいのだろうか、という気もしないではない。しかし図をよく見ると、どの項目も「とても」という評価は少なく、「やや」が多くなっている。このあたりが、多少の批判票の存在を示すものかもしれないが、それにしても、全体として評価が

甘すぎないだろうか。

いい父親、いい母親

これらの延長線上に位置するのが、彼らの両親評価であろう。図12・図13に、父親と母親とそれぞれに対して、いくつかの角度から評価させた結果を掲げた。

まず父親について見てみよう。図12が示すように、「父は仕事を大事にし、仕事に誇りをもっている」(とても・かなり・まあを含めて)83%、「社会についての父の考えは、家族のみんなから一目おかれている」64%と、まず家族の中での父親の地位の確かさを示すような好意的な評価がある。しかもその夫婦の関係は、かなり伝統的な夫婦像に近いもので、「父は身のまわりの世話を母まかせにしている」64%、「父は必ず母をよんでお茶を入れさせる」60%。ひまができると料理する父親は24%でしかない。

他方図13の母親像を見てみても、同じような傾向が見いだされる。「料理の腕前はかなり

図12 家庭の中の父親

(%)

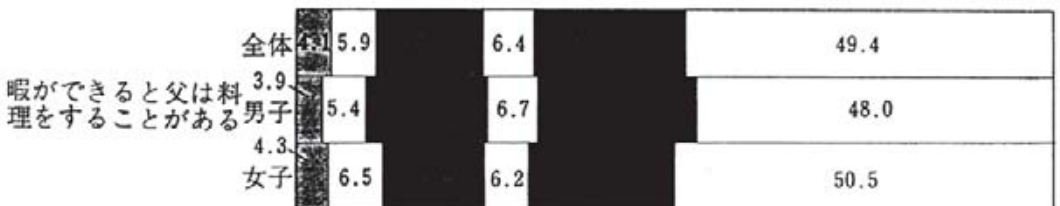
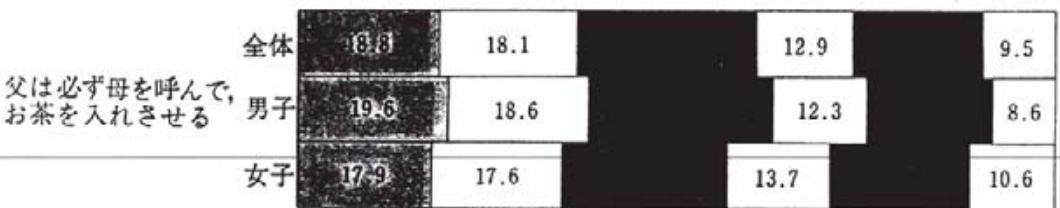
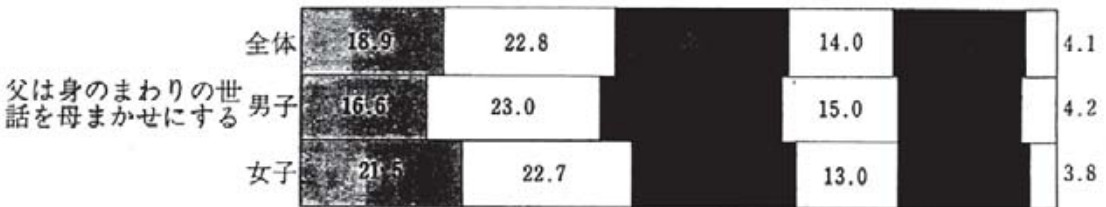
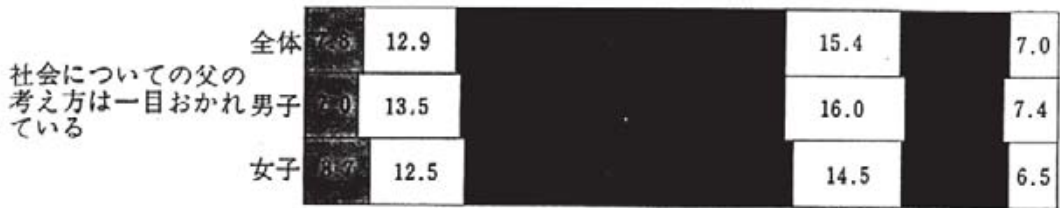
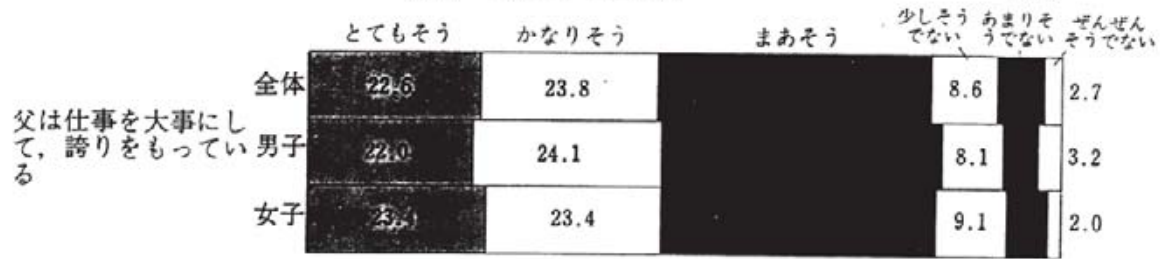


図13 家庭の中の母親

(%)

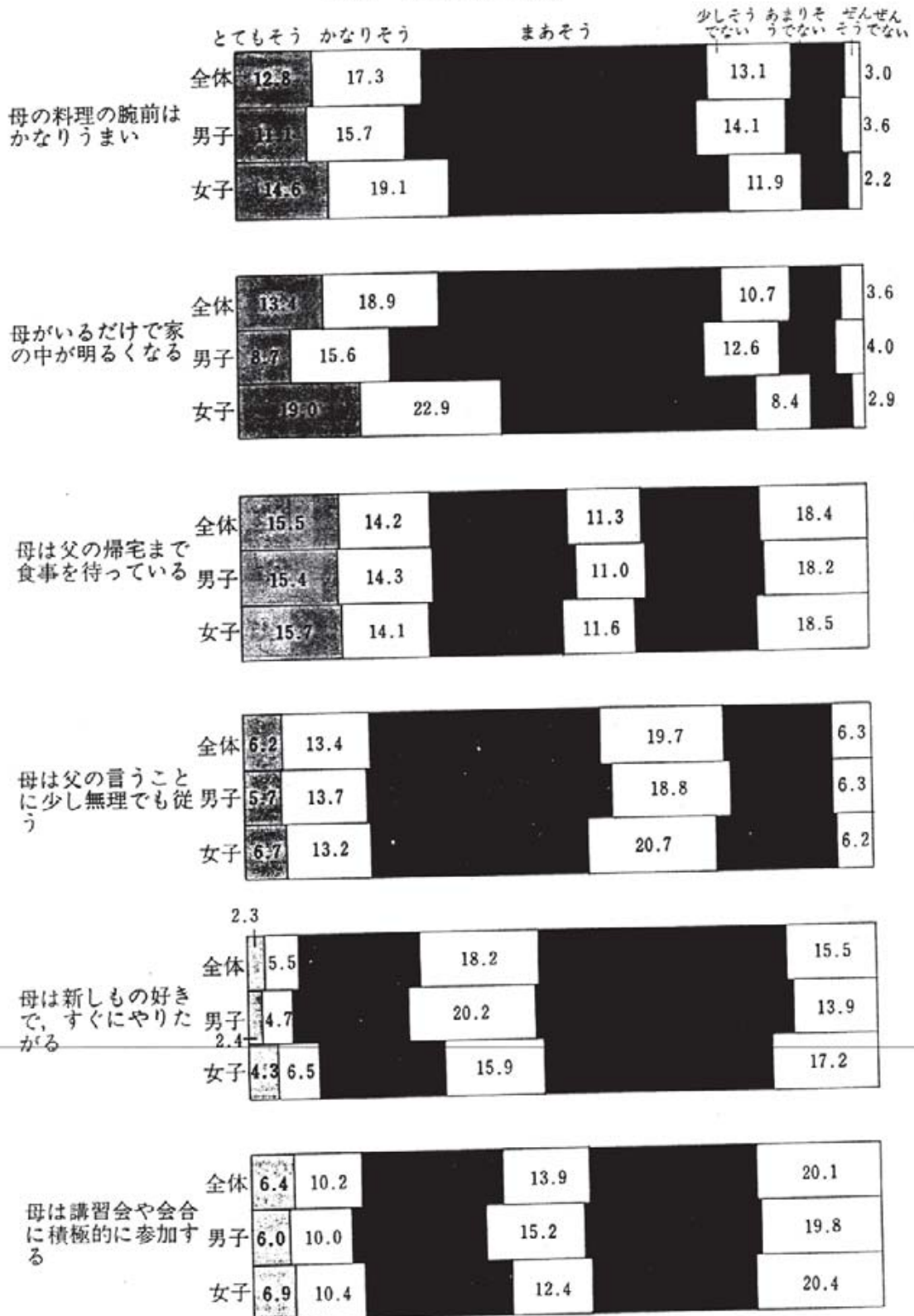


図14 両親の夫婦タイプ

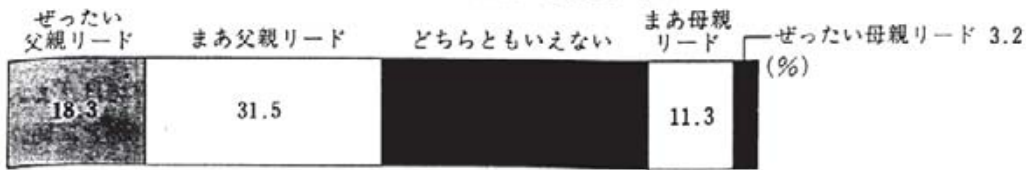


図15 両親の夫婦仲は

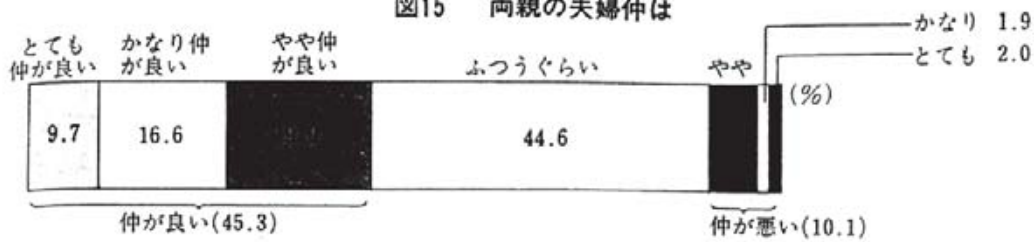
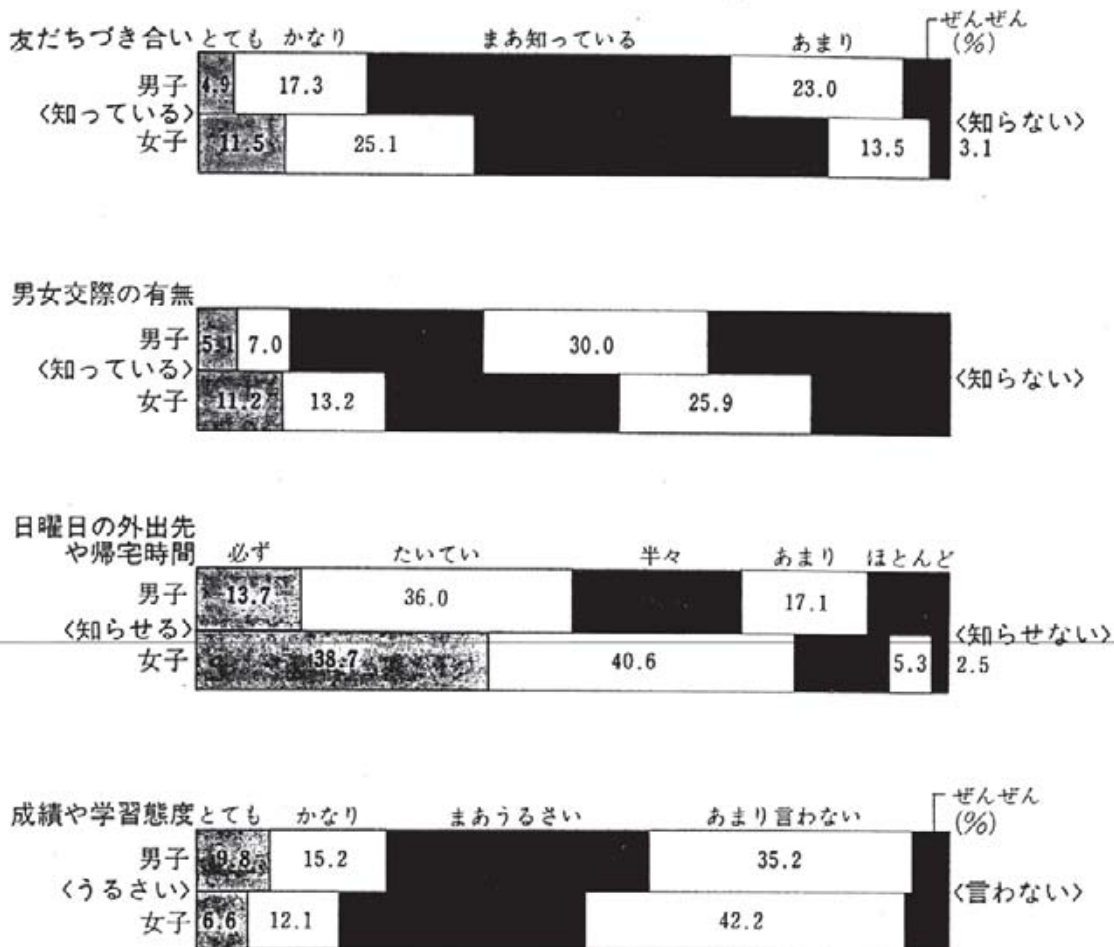


図16 親のコントロール



うまい」76%、「母親がいるだけで家の中が明るくなるような気がする」78%と評価は高い。しかし伝統的な夫婦像は基本的には保たれているものの、どちらかと言うと妻の方からややくずれかかっている感じもある。「遅い父の帰りを待って食事しないている」母親は51%しかいないし、「父の言うことにはすこし無理でも従う」母親も、57%でしかない。半分近くの母親は、こうした場合必ずしも父親と同一歩調をとっていない。このあたりは、昔とは確実に夫婦のあり方が変わり始めている気配がある。

但し、といっても妻たちの変化は、それほど驚くようなものではなさそうである。「新しいもの好きで、おもしろそうなことがあるとすぐやりたがる」母親はわずか27%、「講習会や会合に積極的に参加する」母親も39%と、決して多くはない。変わり始めているが、まだ大きくは動いていない夫婦、というところだろうか。

これらをまとめた印象が、図14にあるように「父親リード型」50%、「母親リード型」15%、「どちらとも言えない」36%という数字になって表れているのであろう。

さらに図15に示したように、両親の仲も、「悪い」というのは10%で、他は「ふつう」が45%、「仲がよい」45%と、彼らの前にある両親の姿はおだやかである。

親子関係もまあまあ

ではこうした穏やかな家庭の中で、生徒たちと両親との関係はどう保たれているのだろうか。図16は生徒たちの行動や生活にどの程度まで親の目が行きとどき、コントロールがされているかを見ようとしたものである。

まず「友だちづきあい」については、「とても、かなり知っている」親は男子22%、女子37%とそれほど多くはないが「まあ知っている」までを含めると71%と83%となり、かなりの割合の親たちが子どもの交友関係を知っていることがわかる。しかし異性関係につい

ては、子どもの方で多少とも教えないようにしているのだろう。「あなたの両親は、あなたがどんな男女交際をしているか（していないか）よく知っていますか」に対しては、「まあ」までを含めると、男子38%女子55%と、同性の友人の場合を大きく下回る。しかし男子と女子では、いずれの場合も女子の方が友人関係をよく親に話しているようで、女子の方が両親と密着している様子が表れている。

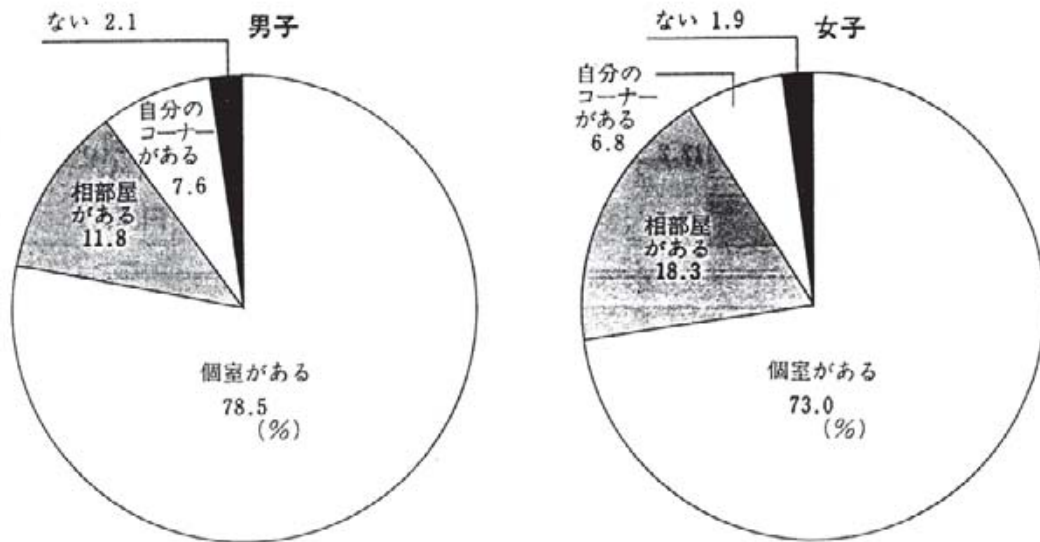
次に「日曜日の外出先や帰宅時間を親に知らせて行きますか」に対する反応をみると、「必ず・たいてい知らせる」者は男子で50%、女子で79%にもものぼる。逆にあまり・ほとんど知らせて出ない者は、男子28%、女子8%にしかすぎず、親子関係はかなり密接で、心のきずなの保たれた状態があるといっていだろう。しかしこうしたきずなが基本的な部分できちんと張られている状態は望ましいものと言えるだろうか、逆にそれが子どもの行動に対する過度のコントロール、すなわち過干渉になってしまったのでは、角をためて牛を殺してしまう結果になりかねない。たとえば、図の最後「あなたの成績や学習態度についてうるさいほうですか」に対する反応は、「全然言わない」のもオーバーかも知れないが、「あまり言わない（逆に言えば少しは言う）」ぐらいが高校生の親と子の関係としては望ましい状態ではないだろうか。しかし図が示すように男子に例をとれば「とてもうるさい」10%、「かなりうるさい」15%で、まあを含めると、こうした面についてうるさい親は60%にも達する。

考えてみると、もともと生物学的に一体だった子と親との関係を、子どもの年齢にあわせて、くっつきすぎもせず、といって離れすぎもせずの状態に保つ努力は、口で言うよりかんたんなことではないのかもしれない。ここで見てきたデータから浮かび上がった親子関係は、深刻な対立や亀裂を含むものではなく、むしろなごやかすぎ、一体感が残りすぎ、という気もしないではない。青年期にある若者たちが、これほど親と対立せずに生活して

図17 両親はあなたを信頼しているか



図18 家庭内に自分の空間があるか



いていいのだろうか、という気もしてくる。
 以上のような親子関係の姿を示すのが図17
 であろう。「両親はあなたを信頼してくれてい

ますか」の問いに、「まあ」も含めて信頼して
 くと答えた者は、85%にも達している。

2. 高校生たちの暮らし方

個室のある者76%

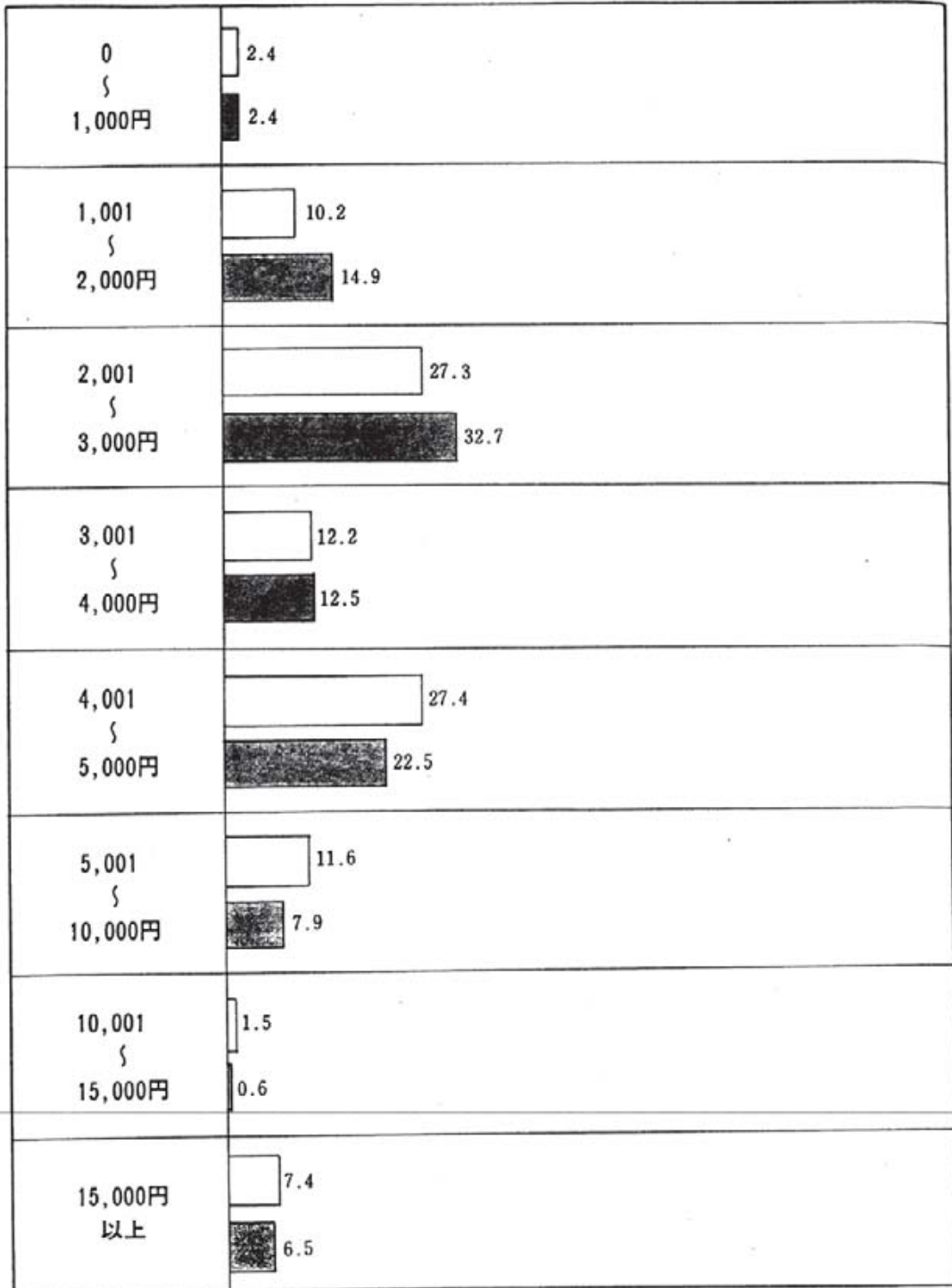
きてそうしたまあ万事に大きな破綻がなく、
 まあ思われたおだやかな家庭の中で、彼ら自
 身はどんなふうに住んでいるのだろうか。

図18は子ども部屋の有無である。自分専用

の勉強室をもっている生徒は予想外に多くて
 76%。他のきょうだいとの相部屋を含めると
 91%が、子ども部屋を与えられていることにな
 る。日本のこの悪い住宅事情の中で、子ども
 たちは何と優遇されているのだろうか。

図19 1ヵ月のこずかい

(%)



□ 男子
■ 女子

図20 自由に使えるお金は、毎月いくらぐらい欲しいか

(%)

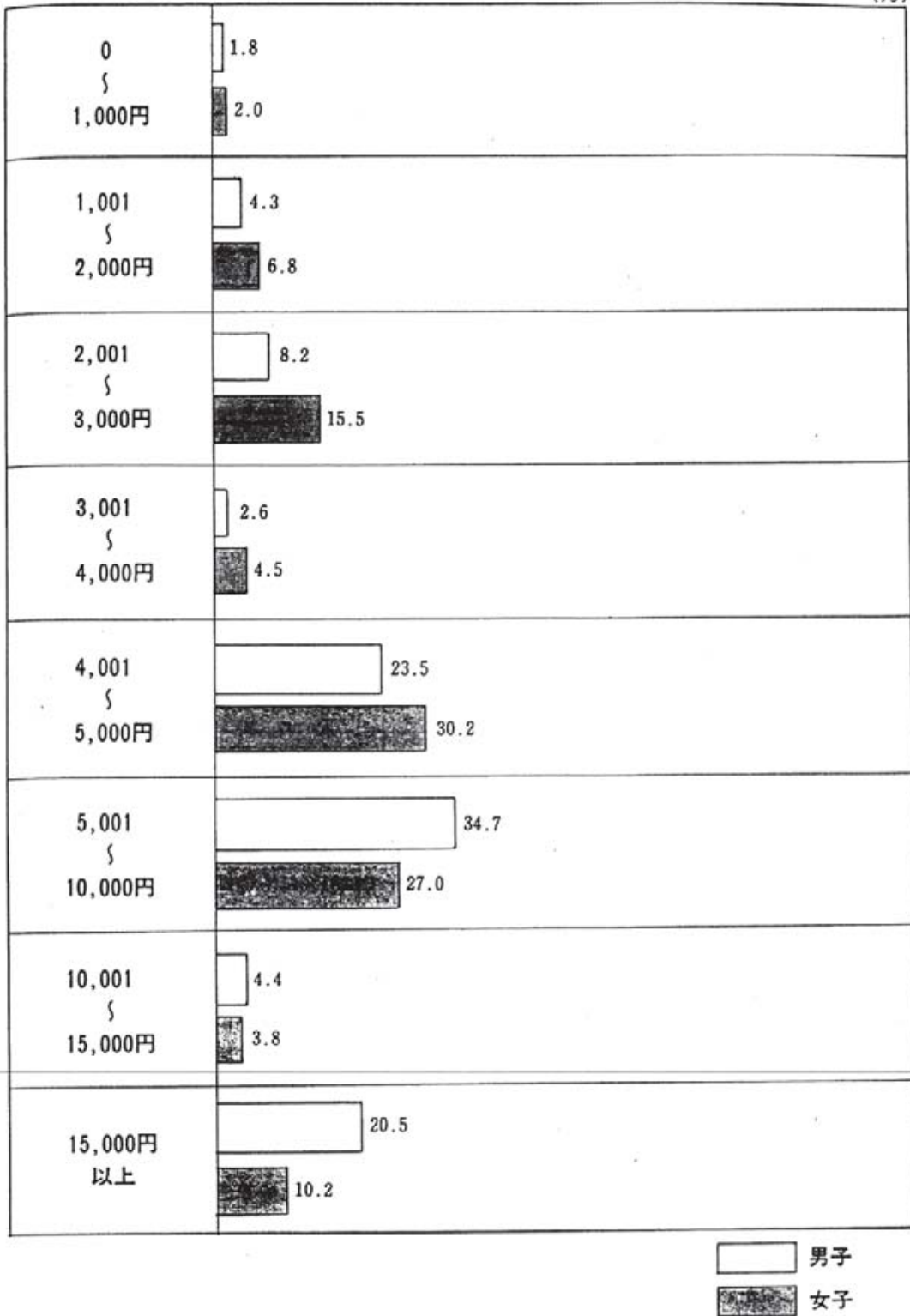


表11 これからアルバイトをしたいか

(%)

		アルバイトをしたい			アルバイトをしたくない		今やっている
		とてもしたい	かなりしたい	まあしたい	あまりしたくない	まったくしたくない	
次の春・夏・冬休み	男子	27.6	18.2	28.0	12.8	11.7	1.7
		73.8			24.5		
	女子	31.3	20.3	29.4	9.8	8.3	0.9
		80.9			18.1		
日曜日	男子	6.4	3.5	14.3	36.1	37.8	2.0
		24.2			73.9		
	女子	4.2	3.1	15.3	39.0	37.3	1.1
		22.6			76.3		
学校のある日の夕方や夜	男子	3.9	2.2	9.9	27.6	54.0	2.4
		16.0			81.6		
	女子	9.5	1.5	7.8	25.2	61.8	1.2
		11.8			87.0		

表12 アルバイトについて

(%)

	男子	女子		男子	女子	
現在やっている	6.2	3.3	→ それは いつか	学校のある時	8.3	2.8
やったことがある	45.9	38.3		休日(日曜や夏休み)	72.4	85.7
(小計)	52.1	41.6		上記の両方	19.3	11.5
1度もない	47.9	58.4				

また図19は1ヵ月のこずかいである。男子の方がやや多目だが、それでも3,000円以下でやっている者は、男子40%、女子50%と意外につつましい消費生活がある。5,000円以上の者は、男子21%、女子15%でしかない。しかしむろんこの額で生徒たちが満足しているわけではない。図20に示したように5,000円以上を希望する者は、男子で61%、女子で41%にもなる。

アルバイトの 経験者47%

親からのこずかいが不足気味だと、子どもたちは当然アルバイトをしたいと思うだろう。

表11に掲げたように、次の長期休みにアル

バイトをしたがっている生徒は、男子74%、女子では81%にもなる。しかし実際にアルバイトの経験のある者は、表12に掲げたように、男子52%、女子42%と多くはない。しかしこの数字は考えてみると、決して低い数字でもない。長期休みにしろ、高校では、経済的理由がない限りは原則としてアルバイトが禁止されているところが多い。しかし生徒たちは、けっこう学校にないしょで働き口を探して働いた経験をもっている様子がみられる。しかしこのことを筆者らは、むしろ評価してよいことではないかと思う。個室を与えられ、親に完全に経済的に依存して生活するのは、この年齢の若者たちとしては、決して十分な生き方とは思えないからだ。

表13 自分の身のまわりの世話 (％)

		自分でやる		半々 くらい	親まかせ	
		いつも	かなり		かなり	いつも
ふとんのあげおろしやベッドのなおし	男子	41.6	19.1	16.8	11.9	10.6
		60.7			22.5	
	女子	70.2	14.1	9.1	4.2	2.4
		84.3			6.6	
自分の部屋のそうじ	男子	28.8	21.3	21.2	19.6	9.1
		50.1			28.7	
	女子	51.7	22.9	13.6	9.7	2.1
		74.6			11.8	
朝の起床	男子	25.6	14.2	17.6	19.4	23.2
		39.8			42.6	
	女子	36.0	16.2	16.7	15.5	15.6
		52.2			31.1	
自分の下着のせんたく	男子	2.2	1.8	3.2	8.5	84.3
		4.0			92.8	
	女子	22.2	11.7	19.3	21.9	24.9
		33.9			46.8	
スポーツウェアなどのせんたく	男子	3.5	2.4	5.2	9.8	79.1
		5.9			88.9	
	女子	19.5	9.8	16.0	22.8	31.9
		29.3			54.7	
ワイシャツやブラウスなどのせんたく	男子	1.9	1.8	3.6	10.0	82.7
		3.7			92.7	
	女子	14.3	8.4	16.8	27.9	32.6
		22.7			60.5	
お弁当づくり (お弁当持参の人だけ)	男子	0.9	0.6	1.8	3.8	92.9
		1.5			96.7	
	女子	12.6	8.3	9.4	21.1	48.6
		20.9			69.7	

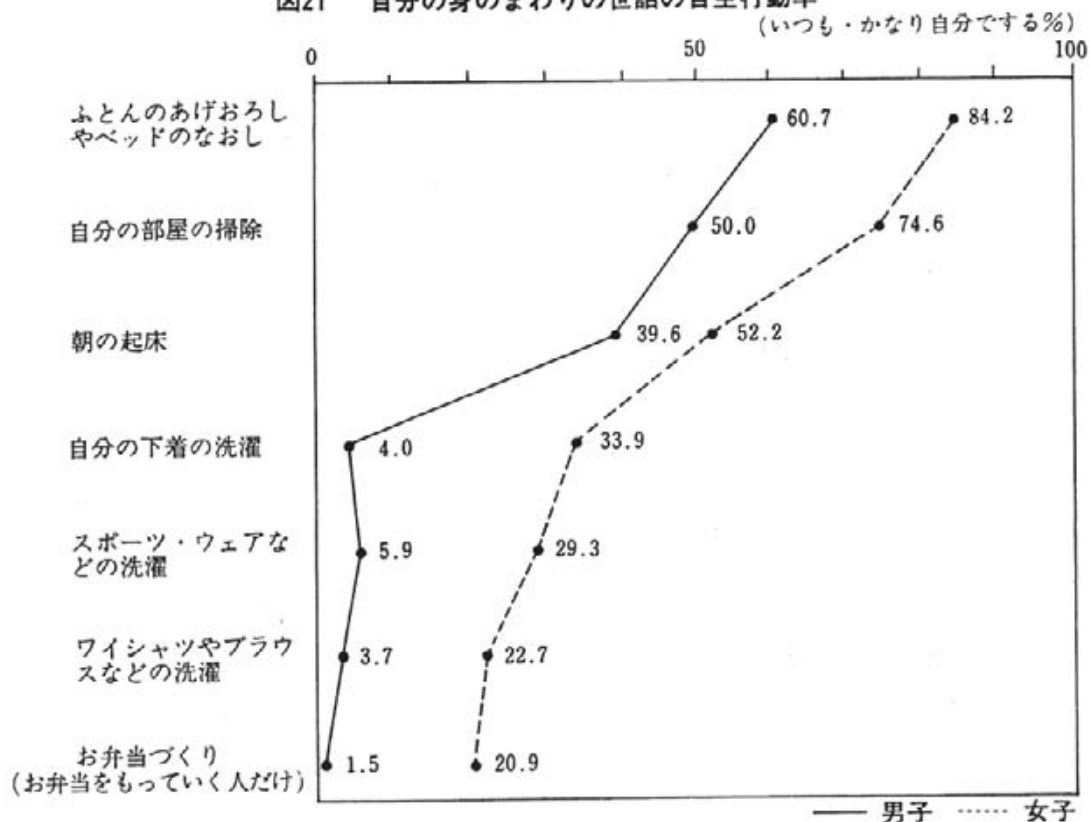
しかしむろん実際には、アルバイトに伴って、いくつかの生活指導上の問題も生じ易いとは考えられる。しかし、体が一人前に成長した若者たちが、労働体験（収入を伴う）を全くもたないで生活していることは、なんとも不自然で、過保護であるように思われる。

自分の身のまわりも
親をあてにして

しかし、と言っても日本のように、高校生がアルバイトをする習慣があまりない社会では、むやみに外へ出れば、それなりの問題も起こってくるに違いない。とすると現状では、外で労働しないまでも、せめて自分の身の回りぐらゐは、親に依存せず、自分の手で処理して生活してもいいのではないだろうか。次にこの点について見ていこう。

まず表13は「ふとんのあげおろし」から「弁当作り」に至るまでの7項目について、それ

図21 自分の身のまわりの世話の自主行動率



それぞれの位自分でやっているか、みたものである。この7項目は、家事の手伝いではなくて、ひとの手をわずらわせずに生活しようとしたら、最少限度この位は自分1人でしなければならないと考えられる項目だ。

見やすさを考えて、この中から「いつも・かなり自分でする」の割合をぬき出して、図21に掲げてみた。ほぼ合格なのは「ふとんのあげおろし」「自分の部屋の掃除」ぐらいで、他は大幅に親に依存している。朝の起床に例をとると、「いつも一人で起きる」のは男子26%、女子36%しかいない。「かなり」をあわせても、男子で40%、女子で52%という数字である。

洗濯や弁当作りにいたっては、ほとんどが親まかせという状態である。とくに男子はひどい。悪い住宅事情の中で親たちは無理して子どもに個室とこずかいを与え、身のまわりのこともしてやって、子どもを王様のようにして生活させる。高校生という年齢は、果たしてこれでいいのだろうか。

成績はバツとしないが スポーツは得意

次に生徒たちの自己評価にふれよう。表34に掲げたように、学習面での自己評価では、いまひとつバツとせず、一流大学への進学は大方が多分もう無理だろうと考えている。たとえば東大や京大への合格にひょっとしたら何とかなるかも、と期待をつないでいるのは男子の17%、女子の5%でしかなく、早稲田や慶応などの一流私立でも、男子の31%、女子の11%しか期待を残していない。多少とも自信があるのはスポーツの能力ぐらいなもののだろうか。彼らが今はもてないが、なんとか将来は恋愛結婚を、と望む気持ちは、こうした高度の社会的達成への道がふさがれてしまったと感ずるところから、生まれてきているのかもしれない。

表14 好きな異性がいるか×自分でやるか(男子)

(%)

		いつも自分で	自分が多い	半々	親が多い	いつも親まかせ
布団のあげおろしやベッドのなおし	両思い	45.9	20.1	13.1	9.7	11.2
	関心なし	39.7	18.1	18.4	10.5	13.3
自分の部屋の掃除	両思い	37.1	17.7	19.2	17.7	8.3
	関心なし	26.3	20.8	21.0	19.1	12.8
朝の起床	両思い	28.7	16.5	16.9	15.4	22.5
	関心なし	28.1	12.4	18.0	17.7	23.8
自分の下着の洗濯	両思い	4.9	2.6	3.8	9.8	78.9
	関心なし	2.0	0.6	4.8	7.8	84.8
スポーツ・ウェアなどの洗濯	両思い	6.8	3.0	8.3	9.0	72.9
	関心なし	3.1	2.2	5.8	7.3	81.6
ワイシャツやブラウスの洗濯	両思い	3.0	2.3	6.8	11.3	76.6
	関心なし	1.9	1.1	4.1	9.1	83.8
お弁当づくり	両思い	0.8	0.8	2.8	4.4	91.2
	関心なし	1.4	0.7	1.9	4.1	91.9

3. 相手のできた生徒たち

こうした暖かく平穏な家庭の中に、ほばいごこちよく身を置く生徒たち。しかし彼らの中でも数は少ないが、両思いの相手を得た者たちがいる。相手ができると、彼らの家庭での暮らし方や将来への見方は変わるものなのだろうか。

相手ができると 自立する

まず表14と表15は、さきに見た「自分の身の回りを自分でするか」について、両思い群と、無関心群だけをとりあげて、表にしたものである。表が示すように、両思い群の方が無関心群より、親まかせにせず自分ひとりとする傾向が出ている。女子に例をとるなら、表15の「いつも自分でする」者の割合は、すべての項目で、両思い群に多いことが見出される。相手ができたとということが、気持ちの上で親離れを促進し、自分の身の回りについても自立的になっていくのだろうか。

似たことは表16のアルバイトの経験にも見出される。男子も女子も、両思いの相手のいる者は、その他の生徒たちより、アルバイト経験を多く持っている。デートの費用ぐらひは自分でかせごうという気になるのだろうか。それともアルバイトをするような層(たとえば進学を予定しないなど)が、相手とのつきあいを確保するのだろうか。

相手ができると 両親とは

さて特定の相手ができると、両親との関係はどうなるだろう。

図22を見てみよう。両思いの相手がいることを、「とても・かなり知っている」親は男子の場合で19%、女子の場合で29%。逆に「あまり・ほとんど知らない」親は44%と38%。すなわち、子どもの異性づきあいは、親たちの目のふれないところで進行しているらしいことがわかる。

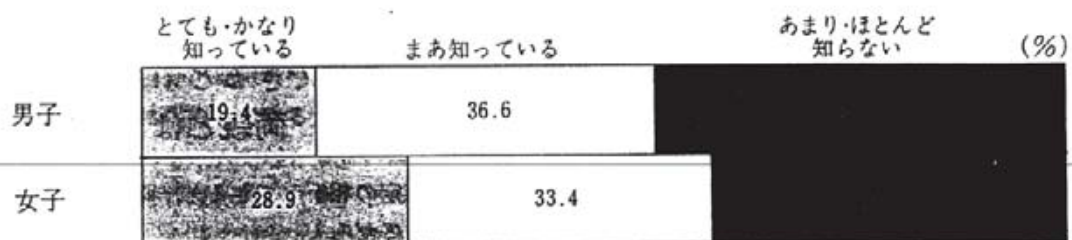
表15 好きな異性がいるか×自分でやるか (女子) (%)

		いつも自分で	自分が多い	半々	親が多い	いつも親まかせ
布団のあげおろしやベッドのなおし	両思い	74.0	12.7	6.2	5.5	1.6
	関心ある	67.9	12.8	11.6	4.4	3.3
自分の部屋の掃除	両思い	56.0	18.2	12.7	7.5	1.6
	関心ある	49.5	22.2	13.6	12.1	2.6
朝の起床	両思い	39.8	17.6	18.2	11.4	13.0
	関心ある	33.4	15.3	20.2	15.8	15.3
自分の下着の洗濯	両思い	27.6	14.6	19.2	19.8	18.8
	関心ある	23.0	10.0	19.5	21.4	25.9
スポーツ・ウェアなどの洗濯	両思い	23.1	10.4	16.6	25.5	24.4
	関心ある	19.1	10.2	15.3	21.4	34.0
ワイシャツやブラウスの洗濯	両思い	16.9	11.4	18.6	28.7	24.4
	関心ある	15.3	8.4	16.5	26.0	33.8
お弁当づくり	両思い	14.0	10.3	10.3	25.2	40.2
	関心ある	13.9	6.2	8.9	18.9	52.1

表16 好きな異性がいるか×アルバイト (%)

	男子			女子		
	現在やっている	やったことがある	一度もない	現在やっている	やったことがある	一度もない
両思い	9.0	59.5	31.5	3.0	50.8	46.2
片思い	8.3	42.7	49.0	3.3	37.4	59.3
関心のある相手がいる	4.5	43.4	52.1	3.1	35.0	61.9
関心ない	5.0	44.0	51.0	3.0	35.0	62.0

図22 両思いの相手のいる者の親は、子の男女交際を知っているか



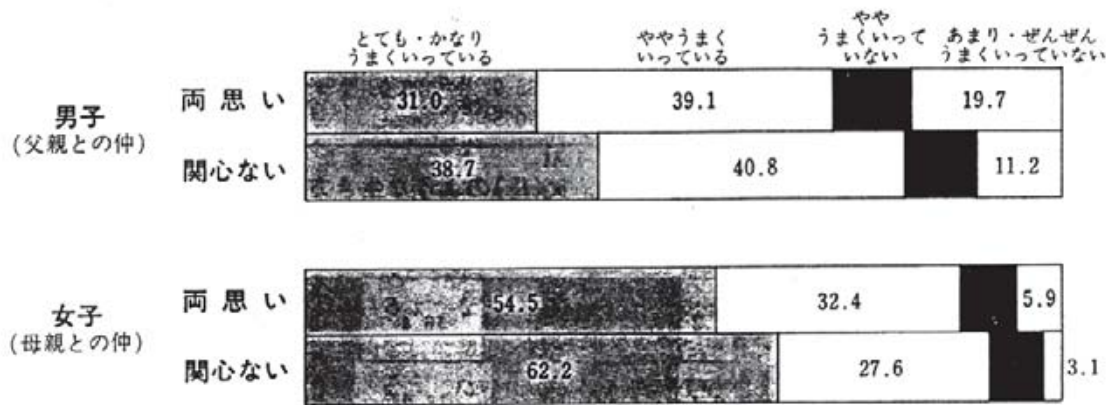
次に帰宅時間などを知らせるかどうかと、相手の有無との関連をみたのが、図23である。「必ず知らせる」と答えた者の割合は、女子の場合両思い群に低くなっている。(男子は差がない) すでにいいくつかのデータで見えてきたように、親との密着ぶりは、どこでも女子の

方が大きかった。しかし相手ができると、女子でさえもが、こうして親に秘密をもったり、親と離れた行動をしはじめる様子が見出される。

図23 好きな異性がいるか×帰宅時間を親に知らせるか（女子）



図24 好きな異性がいるか×同性の親との仲 (%)



こうした親離れの様子を、上の図24で見よう。同性の親とうまくいっているかについて質問した項目では、図が示すように、男子も女子も、相手のいる者たちに、親との関係がわるくなっている傾向が見られる。これは、親との間に多少とも距離を感じはじめたり、また何らかの対立やトラブルがある者たちが、両思いの相手を求めて、それを確保す

る、ということもあろうし、逆に、相手ができたことをめぐって、親との間にトラブルが起きている場合もあるだろう。また相手ができたことで、今までとは違ったまなざしで、親を見ることも起こってくるのであろう。いずれにせよ相手ができた時、若者はこれまでと違った人生へと一步をふみ出すのかもしれない。

4. 両親の家庭はモデルになっているか

前節で見てきたように、生徒たちの生活している家庭はどの家庭も、ミカン色の幸せをもったとても言おうか、平凡だが穏やかな環境として、彼らを受け入れている。生徒たちは、その中において、さしたる矛盾や批判や、大きな不満や欠乏を感じることなく、それなりに毎日を過ごしている。

しかしそれでは、第I章で見てきたような将来の夢、とくに結婚や家庭作りの夢は、親たちのそれをモデルにして、それになぞらえて形づくられようとしているのだろうか。それとも、親たちとは、違った道を歩きたいと念じているのだろうか。

表17 両親との関係はどうか

(%)

		うまくいっている			うまくいっていない		
		とても	かなり	やや	やや	あまり	ぜんぜん
あなたとお父さん	全体	13.3	27.1 (78.9)	38.5	9.7	7.0 (21.1)	4.4
	男子	11.6	26.9 (78.7)	40.2	9.7	7.0 (21.3)	4.6
	女子	15.3	27.3 (78.9)	36.3	9.9	7.1 (21.1)	4.1
あなたとお母さん	全体	19.2	34.0 (88.8)	35.6	6.4	2.9 (11.2)	1.9
	男子	13.7	32.4 (87.2)	41.1	7.0	3.4 (12.8)	2.4
	女子	25.6	35.9 (90.5)	29.0	5.8	3.4 (10.5)	1.3

図25 おとなになったら、父(母)のような生き方をしたいか



彼らが将来に描いている夢の詳細は次章にゆずるとして、ここではただ親たちの結婚生活が、現在彼らの目にどう映り、どう受けとめられているかを、明らかにすることで、この章をしめくくることにしよう。

親の生活は モデルになりうるか

まず、くり返しになりそうだが、表17を見よう。生徒と両親とがうまくいっているかどうかを評定させた結果である。

表が示すように、父親と母親とでは、男子も女子も母親との方がうまくいっていて、「母親とうまくいっていない」者は、11%でしかないが「父親」とでは21%にもものぼる。

しかし全体としてはややも含めれば、両親とよくいっていると答えた者の数は圧倒的に多いことがわかる。

しかし面白いのは、現在がまあ親たちとうまくいっているからと言って、両親のように生きたいか、両親のように結婚して、両親のような家庭を作りたいか、とたずねると、少し風向きが変ってくる様子なのである。

図25に掲げたように、同性の親について、「おとなになったらお父さん(女子はお母さん)のような生き方をしたいですか」とたずねてみると、全体として肯定より否定の方が多ことがわかる。男子の場合、父親のような生き方をしたい者は38%、女子の場合母親のような生き方をしたい者は37%に過ぎない。

また同じ意味の質問を角度を変えてした結果が図26である。「将来母(女子は父)のような人と結婚したいか」に対しても、やはり否定率の方が高い。「そうしたい」と答える者は、男子35%、女子35%で、これまで見てきたデータとは、完全にトーンが違っているのである。

図26 将来、父(母)のような相手と結婚したいか

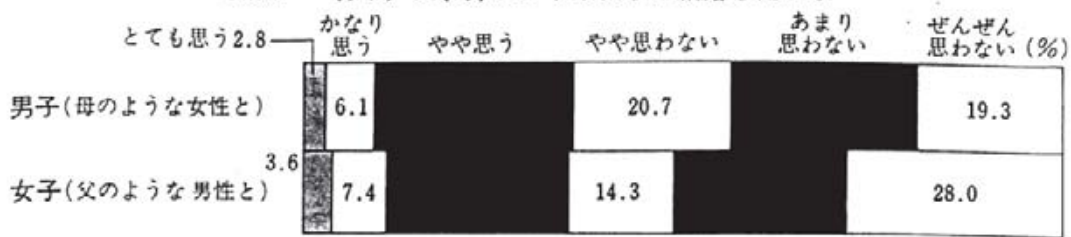


表18 両親の家庭作りはモデルになるか

(%)

	な る			半分半分	な ら な い		
	とても	かなり	やや		やや	あまり	ぜんぜん
全 体	3.4	6.5 (27.1)	17.2	31.2	11.3	18.0 (41.7)	12.4
男 子	3.4	6.0 (25.9)	16.5	32.6	11.9	17.0 (41.5)	12.0
女 子	3.3	7.1 (28.5)	18.1	29.9	10.6	19.1 (41.7)	12.0

さらに追いうちをかけるつもりで、「将来、あなたはあなたの両親が作っているような家庭を作りたいですか」という質問をした結果を、表18に掲げた。全体として、「そうしたい」と答えた者は27%、「そうしたくない」と答えた者は42%と大差である。

現在の自分の親や家庭には、そこそこに満足をしているが、それは、高度の社会的達成という夢をすて、代りに残した唯一の目標、すなわち自分の作る「未来の家庭像」とは、大きく違うのだ、と彼らは確信しているのかもしれない。

ちなみに図27に、どんなタイプの生徒、どんな条件をもった生徒が、両親の作っている家庭をモデルにしようとしているのかを、数量化理論第II類を用いて解析した結果を掲げた。

図が示すように、①夫婦仲がよく、②父親の職業が専門職か管理職で、③経済水準が豊かで、④両親が自分を信頼してくれており、⑤自分も(帰宅時間を知らせるような)信頼感をもって……⑨関心のある異性はいるがとくにつき合いたくはないという結果である。当然と言えば当然とも言えるこの結果

は、逆に言えば、①はともかく、②と③のような社会的達成をなしえていない親たちは、子どもたちからある意味では冷やかなまなざしを受けていると言えるかもしれない。

それにしても生徒たちは、自分の作る家庭の中にいったい何を夢みているのだろうか。それを次章で明らかにしよう。

図27 「両親のような家庭を作りたい」を規定する要因

